

『菅家後集』所載 「哭奥州藤使君」の執筆背景論考

一

筆者は先に「敍意一百韻」に試注を施した拙稿の「作品制作時期考」で次のような一文を公にした。以下再載する。

従来、この詩の制作時期については、川口久雄氏を始めとして多くの先学が「九見桂華圓」の句の解釈を「左遷後九ヶ月後の時期」つまり、「十月から十一月」（晩秋から初冬の候）であろうと論じられて来た。

ところが、前述したように、この詩は「季節の推移」を基軸とした詠作内容になっている。そこには、「春」から「初夏」「梅雨」「盛夏」「残暑」「初秋」そして「仲秋」の景を詠いつつも、「晩秋」から「初冬」の叙景や心象風景が全く詠まれていないように思えるのである。したがって「左遷後の九ヶ月後」という推定にはどうしても納得がいかない。（中略）そこで「九見桂華圓」を「今年に入って九回目の満月を迎えた（＝今まさに九月仲秋の明月が照り輝いている）」との解釈を提起したい。

と述べ、その根拠の一つに、この詩の直後に「485 秋夜 九月十五日」（傍線筆者）を置いていることが、既論の「十月から十一月」という詠作時期との整合性からの矛盾点になるのではないかと論じた。